# 満州国の学校で学んだ人々——私の出会った中国朝鮮族

吉岡　肇

私の出会った中国朝鮮族のなかには、満州国の学校教育を受けられたかたがたがおられる。

ここにご紹介する金天一先生、高永一先生、張承煥先生はいずれも満州国の学校で学ばれ、大学、専門学校、小学校で教育に従事された経験のあるかたがたである。

本稿は私が直接お会いして伺った話といただいた資料などを基にして記したものであり、一部には誤認があるかもしれないが、何かのご参考になれば幸いである。

## 金天一先生

……初対面のとき（二〇〇四年）七一歳

吉林省延辺朝鮮族自治州図們市の朴京玉[1]さんから、

「黒龍江省鶏西市には、大きな日本語学校があるから行ってみませんか。その学校は以前勤めていた学校だから、校長先生とは知り合いです」

とお誘いを受けたのは二〇〇四年八月末のことであった。朴さんの接待で図們に滞在していた私は、鶏西がどこにあるのか全く知らなかったので、

「ここから遠いでしょ？　何日かかりますか」

と尋ねると、

「一日ですよ。朝、図們から急行列車に乗ると、昼ごろ牡丹江に到着します。昼ご飯を済ませるころには学校の車が迎えに来ますから、それに乗ると三時間で鶏西に着きます。夕方には着きますから、ぜひ行きましょう」

「それに、校長先生は七〇歳を超えておられるので、何か昔の話が聞けるかもしれないですよ」と促された。

九月初めの朝七時過ぎ、二人で図佳線[2]（図們—佳木斯）の急行列車に乗り牡丹江へ向かった。途中、その昔、渤海国の上京龍泉府があった「東京城」駅を通過するころ、六〇代半ばの小柄な男性が乗ってきた。向かいの席に座り、しばらくすると、たどたどしい日本語で話しかけてきた。朴さんの通訳を通してわかったことは大体次のようなことであった。

私は朝鮮族で、満州国時代の国民学校[3]で勉強したことがあ

る。学校は延辺[4]の和龍にあったが、今はどうなっているかわからない。

ふたりの話を聞いて懐かしかったので日本語が話したくなった。日本人と話すのは五〇年ぶりだ。

私も牡丹江へ行くのだが、牡丹江は日本人が造った町だ。平和になって良い老後が来て嬉しい。今日は孫の顔を見に行くところである。

一時間ほど同乗して牡丹江駅に着くと、かわいい女の子を連れた娘さんが出迎えに来ていた。私たちは駅前の食堂へ急いだ。食事が終わるころ校長先生のご長男が迎えに来られた。

翌日、金天一先生を訪ねた。学校は天立外国語学院[5]と称し、学生寮を併設した五階建てのコンクリート造りの大きな校舎であった。先生は創立者の学院長であった。

先生の案内で、学院内のＬＬ教室、パソコン教室を見学し、初級、中級、上級クラスの授業を参観した後、広い院長室でお話を伺った。

「天立外国語学院は黒龍江省最大の日本語専門学校で、一二〇〇名を超える学生を預かっています。多いときは二〇〇〇名もいました。学生の半数は遠く湖南、広東省などから学びに来た、南方の高校の卒業生です。地元の中学の卒業生もいます。入学生の志望動機は就職です。北京、青島、上海、広州などのホテル、旅行社、日系企業に就職できますから希望者が多いです」

大柄で気さくな学院長は日本語のとても達者なかたであった。その遠因は先生が学ばれた小学校にあった。

「先生、昔の学校のことを教えてください」

とお尋ねすると、

「私は満州国時代の牡丹江省穆稜[6]県興源鎮国民優級学校[7]に通いました。牡丹江から鶏西まで鉄道がありますが、穆稜は牡丹江の近くです。当時の授業はすべて日本語で行われていました。通信簿（通知表）を貰ったかどうか、朝鮮人の先生がいたかどうか、その時代の学校のことはよく覚えていません」

「穆稜には日本人の尋常高等小学校[8]があったと聞いています。その小学校が私の国民優級学校の前身かどうかわかりません」

「また、牡丹江には日本人の中学校[9]があったようです。これらの資料は当地には見当たらないと思います。お役に立てなくて申しわけありません」

とお答えになった。

満州国の終焉により、先生が中学以降に受けた学校教育はそれまでの日本に倣った制度から解放された。先生はその後鶏西市技工大学の教職に就かれたが、なおも日本に関心を抱き続けておられた。

一九七二年の日中国交回復後、先生は独学で日本語を再学習された。文化大革命（一九六六－一九七六）中の空白があったのにもかかわらず、仕事の合間を縫っては毎日数時間の学習を重ねられ、独自の日本語学習法「短期会話修得法」を開発され

た。その方法は若い学生に効果的な学習法で、いまも学院に引き継がれている。

一九七八年から始まった改革開放政策はロシアとの国境に近い石炭の町鶏西にも及び、市当局の強い要請に応えて、本格的に日本語教育に着手されたのは五〇歳のころであった。その後、大学教授の職を辞して、民間最初の天立日本語選科学校を設立され、今日まで二十数年間にわたって鶏西の日本語教育界と私立学校教育界に尽力されている。

二〇〇六年九月の訪問では、学院を大学に昇格する構想を伺い、二〇〇八年一二月の電話では、学院の経営をご長男に委ねられ、月に一、二日ほど出かけているとお聞きした。先生は大学昇格の夢をご長男に託されておられるようであった。

鶏西では天立日本語専科学校の成功を受けて次々と新しい日本語学校が誕生した。現在、鶏西には、天立外国語学院のほか、鶏西大学星州日本語学校、誠実日本語学校など一六校の日本語学校があるが、すべて私立学校であり、それらの学校の日本語教師はほとんど金天一先生の下で学ばれた人であるという。

毎年一万数千人の学生を受け入れる鶏西の日本語学校は地域の経済にも大きく寄与しており、ここでは日本語教育関連事業は一大産業となっている。これも国民優級学校で学ばれた金天一先生の大きな業績の一つである。

## 高永一先生

……初対面のとき（二〇〇一年）七七歳

二〇〇一年一二月、朴京玉さんと延辺大学教員住宅に高永一教授を訪ねた。

高永一著『中国朝鮮族歴史研究参考資料匯編』第二輯（文史資料選）第一分冊（上）（白山大学叢書、一九九三年七月）を譲っていただくためであった。

すでに一二年前に退職されていた元延辺大学歴史学講座長は初対面の私たちを快く迎えてくださり、幸いにも書斎に残っていた同書を譲っていただくことができた。そのうえ『延辺朝鮮族自治州教育志 一七一五－一九八八』まで拝借してしまった。

高永一先生（一九二四年生、朝鮮平安北道出身）は満州国時代の吉林市にあった師道大学[10]（歴史地理一九四五年肄業）[11]で学ばれた日本語のとても堪能なかたであった。中国朝鮮族最初の高等教育機関、延辺大学[12]の初代校長朱徳海の招請により、一九五一年歴史学部の教師として赴任され、一九八九年一〇月までその職にあった人である。

ご長男は北京に、ご次男は徳王[13]の孫娘と結婚してカナダに居住されている。

初めて訪問したとき、

「徳王の研究をなさるならご紹介しますよ」

とありがたいお言葉をいただきながら、私は、

「延辺朝鮮族の教育史に関心があるので、それに関する書籍、研究資料を紹介してください」

と答えてしまった。いま思えば、遠慮なくご厚意に甘えておけばよかったと後悔している。

その後、二〇〇二年から二〇〇五年まで毎年お訪ねし、金日成のパルチザン、琿春守備隊（朝鮮人部隊）の出撃、延辺の遺跡、師道大学入学試験の口頭試問の様子や日本人教師の朝鮮人学生に対する扱い、文化大革命時の被害、カナダのトロント大学訪問など、貴重なお話や体験談をお聞きした。

師道大学の口頭試問では、次のような問答があったそうである。高先生の日本名は高村であった。

「おい、高村（タカムラ）、英国からの独立を指導するインドのチャンドラ・ボースをどう思うか」

「はい、立派な指導者です。独立は当然です」

「うん、そうか。その通りだ。では、朝鮮や満州の独立についてはどう考えているか」

「はい、……」

当時の先生のお答えは言うまでもない。合格されたのであるから。

師道大学には、歴史地理班のほか、教育、国語、数学、物理化学班があった。あるとき、先生の出席された地理の授業で若い日本人教師から、

「何か質問はないか。何でもいいから、あれば遠慮なく言いなさい」

と言われて、真面目な朝鮮人学生が手を挙げて些細な質問をしたそうである。授業後、その学生は教官室に呼ばれ、

「生意気だ」

と叱られて、顔にアザができるほど殴られたそうである。六〇年前のこの事件は先生にもよほど強い印象に残る出来事であったのであろう。

大学の歴史、社会などを教えた文科系の先生はとても威張っていたが、数学、物理など理科系の先生は朝鮮人学生にも優しかったそうである。

伺ったお話の中で、特に残念に思うことは、文化大革命時に、それまでに集められた貴重な研究資料や著書をすべて焼却されたことである。

日本語で書かれた書籍・手紙などが発見されれば「特務」と見なされ、命が危険に晒された当時の話をお聞きしたときには、その無念さを察するにお慰めする言葉もなかった。

高先生は一九八五年九月にカナダのトロント大学東洋学部と提携を結ばれ、一〇月に同校を訪問された。この提携は中国最初の外国の大学との提携であった。

二〇〇八年九月、愛知大学教授三好章先生とお訪ねしたときにも八四歳の先生はとてもお元気であった。近々、延辺大学の図書館に「高永一文庫」が創設されることになり、ご自宅にあった書籍、資料のほとんどを大学へ寄贈なされたという。拝見したのはトロント大学を訪問されたときの記念写真だけであった。

二〇〇七年に著書を二冊発刊されたと伺い、先生の衰えぬ研究意欲に身が引き締まる思いがした。

## 張承煥先生

……初対面のとき（二〇〇一年）七〇歳

図們で張承煥先生（一九三一年生）と初めてお会いしたのは二〇〇一年一二月であった。以後、幾度もお会いしている。先生は日本の軍歌が得意なかたである。会食のときにお酒が入ると、決まって日本の軍歌を歌われる。

「日本の軍歌はいいですね。歌詞がいいですよ。心に響きます」

と昔を懐かしむかのように、「同期の桜」や「戦友」を歌われたのが印象に残っている。

先生は満州事変の起った年に延辺の龍井村で生まれ、満州国のとき、街と改められた龍井街で小学生のときから苦学して日本が改編した学校で教育を受けられた人である。

龍井街弘中国民優級学校を卒業された先生は、一九四三年の一二月末、間島省立龍井第三国民高等学校[14]（四年制の中学校、工業科）土木科に進学され、二年生のときに終戦（一九四五年八月）を迎えられた。

二〇〇二年七月にいただいた「自叙伝」から、先生が送られた時代の一端を知ることができる。先生のお許しを得てその一部を紹介したいと思う。

### 自叙伝

私の父親は朝鮮咸鏡北道清津市富寧郡三海面で、漁師をしながら魚を売って粟米を買い、家族六人の生活を維持しました。

次男であった父親は愛国心が深く、義士たちと一緒に祖国の独立を目指して日本の政策に抵抗していました。ロシアの十月革命が成功すると、その影響を受け、一九一九年、ついに清津の「三・一集会」に参加して朝鮮独立万歳を唱えました。

その後、政府は独立万歳を唱えた義士と友人達を一人ひとり逮捕して、ソウルの西大門監獄に投獄しました。その夜、父親と二〇人の友人は小船に乗ってロシアのウラジオストックへ逃亡し、五年間労務者として生活しました。

しかし、故郷と両親が恋しくてたまりませんでした。そして一九二四年秋のある日、一〇人の友人と小船に乗って故郷に帰りました。息子を見た両親は、

「政府はきびしい厳令を下し全員を逮捕するから、すぐにここを離れて中国へ行くように」

と促しました。そうして一〇人の友人と共に豆満江を渡って北間島[15]の龍井村[16]に来ました。〝バカジ〟[17]のほか何も持たず妻と一緒に涙の生活を送りました。

一九三一年一月、こんな環境の中、私は草原の農家に生まれました。母は毎日ゴミ箱でいろいろな物を拾い、父は日本人の商会で雑役夫として朝から晩まで勤めました。

一九三八年（満七歳）二月、私は龍井街弘中国民優級学校に入学しました。その学校は間島省で最もよく名前が知られ

た学校です。両親の喜びはこの上ない光栄だったと言っても過言ではないでしょう。私は五年生のときから新聞配達をして両親を助け、授業料を調達し、熱心に勉強して六年生のときは優等生の成績を修めて卒業しました。

一九四三年一二月、私は龍井第三国民高等学校の入学試験を受験し立派な成績で合格しました。でも、貧乏な私の家では学費を納めることができなくて、そのままでは学校へ通うことができませんでした。両親の心痛は言うまでもなく、村の人たちみなが承煥はよい学生だから中学へ送らなければなりませんと励ましてくれました。

困難に直面していたちょうどそのとき、ロシアから帰国した父親の親友が助けてくださって、入学費と授業料を学校に納め、勉強することができました。

私はあまりの嬉しさに、逆立ちをしながら大声で泣きました。

一九四三年（一二歳）一二月末、憧れの国民高等学校に入学しました。この高等学校は工業学校で土木と建築の二学科がありました。私は詰め襟の制服を着て、Ｉの襟章と土木のバッジを着け、丸帽子には白線の三線をつけました。三本の細い白帯は第三国民高等学校の意味です。学生たちはみな革靴を履きましたが、私だけは運動靴でした。

一九四五年（一四歳）、二年生になった私は、おとなしく少し顔つきがよかったので、町の人々に愛されました。当時は戦争時代の非常時で、庶民は毎日防空訓練をし、窓ガラスには紙を「米」の字に張り、婦人はモンペ姿で、毎日忙しい日々を送りました。

日本帝国は国民に「一粒の米でも節約せよ」と呼びかけながら、適齢期の青年を戦場に送りました。当時、満二〇歳の青年は一期壮丁で、二期、三期まで軍事訓練を行っていました。

学校の授業は午前中で終わり、午後は軍事訓練と勤労奉仕にあてられました。

一九四五年八月に広島と長崎に原子爆弾が落とされ、遂に日本帝国は降伏しました。

一九四六年（一五歳）、朝鮮文字のわからない私は、中学校へ編入学して朝鮮語を習いました。

一九四八年（一七歳）、中学を卒業し、同年一二月に老頭溝天宝山小学校の教師になりました。

一九五四年（二三歳）五月、延辺ゴム工場の求めに従って老頭溝から図們へ転勤しました。ゴム工場では、業務員、技術員、職場主任などの職を務めました。

一九六六年（三五歳）から「文化大革命」（～一九七六）

一九七二年（四一歳）、日中国交回復後、図們で最初の日本語教師になりました。その当時は第二の「文化大革命」が来たらどうするかとても怖かったです。何故なら「文化大革命」のとき、「日本の特務」とレッテルを貼られ、三か月間反動派たちの圧力の下で苦しみましたから。

その後、私は翻訳に熱中し、中国語を日本語に、日本語を

朝鮮語に訳しました。また、小説も五編執筆して延辺雑誌に掲載し、新聞にも投稿しました。

努力の積み重ねは立派な花を咲かせました。

一九七四年（四三歳）一〇月二日、私は「全国教育翻訳工作会議」の代表として北京へ行き、二か月の会議に参加しました。

一九七四年一二月一八日、「党委員会政治局」の周恩来、鄧小平、葉剣英、李先念など指導者たちの接見を受け、人民大会堂で一緒に写真を撮りました。これは永遠に忘れられない一生の光栄です。今も三〇年前に撮った古い写真を見ながら過ぎ去った昔を懐かしみます。

一九七九年（四八歳）、中国で「四つの現代化[18]」が実施されると、図們市党委員会は私を教育科に出向させ、外国語を教えるように要請しました。教育科では図們市技術科学館の科学館員たちに日本語を教えました。でも、三五年ぶりに再開された日本語教育をしようとしても、図們には専門の書籍がなかったのです。私の中学時代の立派な参考書は文化大革命のとき全部燃やしてしまって一冊もありませんでした。私は日中友好新聞に手紙を出して、

「国語辞典、広辞林などを送ってください」

とお願いしました。その新聞をご覧になった東京都の山田先生と富山市の桃井弘一先生が辞書を送ってくださいました。当時、そのような辞書が手元になかったら、日本語を教えることは容易ではなかったと思います。

一九八五年（五四歳）、病気で延辺ゴム工場を退職しましたが、図們市技術科学館の招聘で一九七九年から一九九四年（六三歳）まで日本語を教えました。

一九九五年（六四歳）七月、図們市日本語養成センターの招聘を受け、再び日本語講師になりました。

時の流れは速いです。私もすでに七一歳になりました。でも、若者のために、朝鮮族のために、私は弱い体を克服して熱心に教えています。今後とも力の限り図們の振興と学校の繁栄のために努力しようと思います。

二〇〇二年七月二二日　夜九時

張　承煥

私はこの日本語で書かれた手記を拝読して感動した。特に、満州国末期の間島省にあって、省内随一の小学校、龍井街弘中国民優級学校へ入学され、憧れの龍井第三国民高等学校に学ばれても日本の敗戦のために卒業できず、改めて朝鮮文字を習得された先生の青少年時代のご体験談に目が潤んだ。今年（二〇〇九年）七八歳になられた張先生は数年前にお仕事から離れられ、悠々自適の毎日をお過ごしである。心よりご健康を願っている。

＊　＊　＊

私は二〇〇八年九月より、華南理工大学の外国人教師として広東省広州市に滞在している。中国で初めて訪れたところが広州であり、そのとき親しくなったのが延辺朝鮮族の中山大学学生であった。今回、吉林朝鮮族の副教授のお世話で二五年ぶりに広州に来ている。真に不思議な縁である。

勤務先の華南理工大学広州汽車学院は二〇〇六年九月に創設された工学を主軸とした私立大学であり、現在、約六千人の学生が学んでいる。創立三年目の二〇〇八年九月、外国語学部に日本語学科が増設され、募集人員の二・五倍にあたる第一期生九六人の学生が入学した。第三期生六〇人の英語学科を凌ぐ人気である。

私が専任の日本語教師として招かれたのは、華南理工大学外国語学院で日本語を教えておられる金華副教授からの推挙があったからである。吉林市出身の金先生は聡明な女性で、愛知学院大学で博士の学位を取得され、三年前に帰国されていた。日本語学科の新設に伴い、専任の日本人教師に私を推薦されたのが二〇〇八年の春であった。

広州汽車学院では、日本語学科三クラスの会話と聴解の授業を担当しているが、日本語だけで進めている。それでも私の学生はほとんど休まないし、授業に関係のない私語も全くない。一生懸命に学ぶ姿に充実感を覚えている。

しかし、汽車学院の授業も担当されておられる金先生のお話によると、上級生の教養科目、大学日本語の授業では私語が多いクラスもあるし、真面目に勉強する学生の少ないクラスもあり、時には教える気力が萎えることもあるそうである。

また、外国語学院日本語学科の学生は入学した華南理工大学が国立大学の名門校ということもあって、自尊心の強いわがままな学生が目に付くと聞く。自分の努力不足を棚に上げ、成績が良くないのは先生の教え方が悪い、厳しい先生の授業には出たくないなどと勝手な理屈をつけて勉強をしない学生や、保護者の過度な要求に驚くとも指摘されている。担任をされている女学生同士の些細な喧嘩にも母親の干渉があり、夜中に掛かる長時間の電話に悩まされる先生のお話などは、中国に限った話ではない。すでに日本でも経験済みのことである。

ご紹介した金天一先生、高永一先生、張承煥先生の満州国時代は、国民高等学校生（中学生）はエリートであった。大学全入時代に向かう中国の大学を三人の先生がたはどのように見ておられるのであろうか。機会があれば伺ってみたいものである。

## 注

〈1〉 図們市教育委員会認定「図們市愛延日本語学校」校長。

〈2〉 昭和八年六月一五日起工の図們と甯北（旧称牡丹江）をつなぐ全長二六五キロの図甯線並びに甯北市より林口勃利を経由し、松花江岸桂木斯に至る甯佳線からなる。『満州日報』一九三四年（昭和九年）一一月三〇日。

〈3〉 一九三八年（康徳五年、昭和一三年）一月一日より学校令および学校規定が施行された。学校令によって定められた新学校体系は初等教育として国民学校四年、国民優級学校二年とし

た。

〈4〉「延辺」、この呼称は清末の官庁文献に出現し始めた呼称でもある。当時中国東北には「延辺」、「東辺」、「倫辺」と呼ばれる三辺があり、延辺は延吉境内を指し、東辺は今の遼寧省鴨緑江通化などの地を、倫辺は黒龍江省呼倫貝尓辺疆を指していた。高永一編「一、解放前延辺学校教育概況史料　2．朝鮮族教育史序幕」（『中国朝鮮族歴史研究参考資料匯編』第二輯（文史資料選）第一分冊（下）、白山大学叢書、一九九三年、四五九頁。

〈5〉日本語教育を主とした全日制の外国語学院。前身は一九八四年設立の鶏西市天立日本語選科学校。二〇〇三年五月に鶏西市天立外国語学院となる。二〇〇八年五月現在の学生数は約二千人。卒業生は約二万人。

〈6〉一九三七年（康徳四年、昭和一二年）七月一日施行、一九四三年（康徳一〇年、昭和一八年）一〇月、間島省と東安省と共に東満総省となる。

〈7〉六年制の小学校。当時の小学校は国民学校四年、国民優級学校二年。国民学校は単独で設置することができ、また国民優級学校と一貫して設置することができた。一貫して設置された学校は国民優級学校と呼ばれた。

〈8〉一九三五年（昭和一〇年）一二月一日開校の穆稜日本尋常高等小学校、牡丹江学校組合管轄学校。邦人教育機関。昭和一三年度「牡丹江市の小学校史」。

〈9〉牡丹江中学校。一九四〇年（昭和一五年）四月に新設された七校（新京二中、錦州中、牡中、四平高女、間島高女、哈爾浜（ハルビン）商業、奉天女子商業）の一つ。

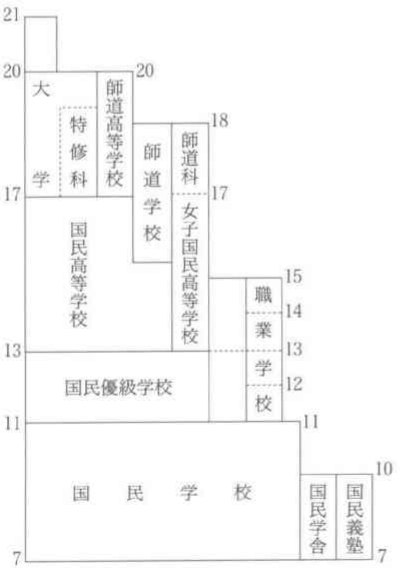
〈10〉一九四二年に満州国が設置した国立大学。吉林師道大学と称することもある。満州国唯一の高等師範学校。前身は一九三四年開校の吉林高等師範学校、一九三八年「学校令」により師道高等学校と改称。

〈11〉日本の敗戦、満州国の終焉により、卒業証書を授与されなかった。

〈12〉一九三四年九月二〇日、吉林市に吉林高等師範学校として設置、三八年吉林師道高等学校と改称、四二年吉林師道大学とさらに改称した。王鴻賓・向南・孫孝思主編『東北教育通史』遼寧教育出版社、一九九二年、六〇二頁。

〈13〉ジンギスカン第三〇代目の子孫、蒙疆政権主席。

〈14〉一九三七年、日本（朝鮮総督府）は延辺のすべての公立および私立中学校を接収し、一九三八年、元来の中学校および女子中学校を一律に四年制とし、国民高等学校および女子国民高等学校と改称した。国民高等学校、女子国民高等学校とも実習時間を多く取り、実業教育を教育の中心とした。国民高等学校




参考資料　満州国新学制学校大系図（数字は年齢）
出所：『満州国史総論』第一法規出版、1970年、585頁。

はいずれも実業学校で図們国民高等学校を除いてすべて単科校であった。例えば、間島第一国民高等学校は農業学校であり、龍井第一国民高等学校は商業学校、龍井第三国民高等学校は工業学校であった。女子国民高等学校は四年制の本科の上級に一年制の師道科を設置することができた。間島女子国民高等学校は本科に師道科を付設した学校であった。『延辺朝鮮族自治州教育志 一七二五―一九八八』八九頁。

〈15〉 朝鮮語の語音では、墾と間は同音であり、また、土と島は相似した音なので、民間で使用され始めたときには「墾土」と「間島」は区別がつかなかった。時が経つにつれて間島と統一されていった。朝鮮農民の大量の移住と居住範囲の拡大に伴って、間島の範囲も変化するが、一般には、延吉、和龍、汪清、琿春等を総称して間島と呼んでいる。豆満江以北を北間島、鴨緑江以北を西間島と称し、延辺の光霽峪以東を東間島、和龍峪以西を西間島と言うこともある。北間島は主に豆満江以北の延吉一帯を指すことが多い。

〈16〉 現在の龍井市である。『龍井県志』によると、龍井が龍井村と呼ばれるようになるのは一九〇七年頃のようである。龍井村は大きな朝鮮人集落であった。朝鮮人私立学校の多くはこの地で誕生した。延辺最初の私立学校、瑞甸書塾を廃止した日本の韓国統監府臨時派出所もその跡地に間島普通学校を設立し、教育を通して朝鮮人を日本の陣営に取り込もうとして中国と対峙した。

〈17〉 水飲みに使う縦に半分に切った瓢箪。

〈18〉 一九五四年、六四年、七五年、第四期全国人民代表大会で周恩来首相によって三回にわたって提起された。農業・工業・国防・科学技術の四つを近代化（中国語では「現代化」）すること。